

児童文化財の絵本にみる環境教育について

—0.1.2. 歳と 3.4.5 歳の絵本を比較して—

About the Environmental Education seen in a Picture Book of Juvenile Culture Goods.

-0.1.2. a Picture Book of 3.4.5 years Old is Compared with the year-.

早川 礎子*

Motoko Hayakawa*

*小田原短期大学

〔要約〕 児童文化財の 1 つである絵本には、環境教育に関する題材が多く取り上げられている。保育者養成校の 1, 2 年生の自由記述の調査によれば、発達段階への理解を保育実習の中で学び、それを保育の遊び道具という形で実習の中に意欲的に展開している。これに対して、1 年生は、子どもの発達段階に言及せずに直接体験として自然物と触れ合うことのみが環境教育としていることに相違点があった。本稿では、保育者養成校の学生の実習体験からの学生の気づきをもとに絵本の読み聞かせと環境教育の在り方について検討したい。

〔キーワード〕 絵本、環境教育、植物、動物、発達段階

1. はじめに

乳幼児期は言葉を獲得する過程である。乳幼児は保育者が状況に合わせて使う言葉を理解し、言葉を自発的に使用して、言語を獲得する。また、言葉を獲得する経緯には「子ども」「対象=児童文化財」「相手」の三項関係も重要である。その言語の発達を促す児童文化財として次のものがある。手遊び（歌いながら手で表現する遊び）・絵本（絵だけのもの、絵と文の両方で書かれたもの）、紙芝居（物語を連続して描いた絵を劇的な語りで展開する劇的な語り）である。この児童文化財は、言語発達の支援において欠かせないものとされている。それは、子どもと言語の媒介となるものであり、それを通して社会性さえも発達させることができる。具体的には、以下の 3 つの方向性がある。領域(言葉)の 3 つの方向性といえる。それは①子どもたちが自分の気持ちを言葉によって表現しようとするようになること②保育者や周囲の友達の言葉や話をよく聞き、自分の体験や考えを話せるようになること③絵本や物語にふれることによって、言葉による文化を理解し親しめるようになったことである。

てくことである。

一方、幼稚園・保育所の子どもを取り巻く「環境」には①物的環境②人的環境③自然環境があり、物的環境の一つに絵本がある。保育所保育指針の保育内容（環境）は、周囲の様々な環境に好奇心や探求心を持って関わり、それらを生活の中に取り入れていこうとする力を養うことを目的にする。また、幼稚園教育要領では、幼稚園教育の基本は環境を通して行うとしている。山崎（2014）は保育者養成校の学生が自然とかかわり、季節感を取り入れた様々な活動を学生自らが体験することを通して、学生の気づきを促す授業実践について報告している¹。また、小谷（2013）は、「遊びには様々な保育内容が包括されている」と述べている²。このように保育における言語指導法と環境指導法は重なり合う教育が必要とされている。

2. 研究目的および方法

絵本には、環境教育に関する題材が取り上げられている。これらには植物の栽培、動物を主人公にした作品、動物の形態を題材にした作品等が環境教育と重なる。保育内容（環

境)を担う絵本において、その環境教育の意義を発見して、幼児の発達段階を理解しつつ、学生が読み聞かせを行うことは重要な課題ではないか。本稿では2016年～2017年にかけて行われたA専門学校の集中スクーリングの言語指導法・環境指導法の実践において実習経験が2度ある2年生・実習経験のない1年生へ「絵本の読み聞かせについて」「環境教育について」の記述調査を行い、実習経験をもった2年生が保育実践で観察した幼児の園内・園庭の環境教育・絵本の言語環境への姿への学生達の気付きと、先行研究で得られた知見を併せて検討していきたい。

3. 結果・考察

(1) 0～2歳の絵本

0～1歳児ではリズムに合わせた絵本を読み聞かせることによって、興味を持たせる。特に、0歳児用の絵本は、玩具として遊べる絵本である。丈夫で安全なものが適する。0～1歳の絵本は絵と色と日本語の音の組み合わせや変化や連続性を楽しむ。子どもには、日本語のオノマトペ(擬音・擬態語)の美しさや楽しさを味わせる。この発達段階では「幼児の直接体験がイメージとして内在される。それに寄り添い共感する大人の存在」が求められる。

(2) 3～5歳の絵本

3歳～5歳になると、日常生活の流れを一人でこなせるようになり、簡単なお手伝いができるようになる。3～4歳になると、単純な物語が理解できるようになる。4～5歳が対象の絵本の内容は表現にも深みがあり、大人が読んでも楽しめる絵本が多くなる。想像することで、描かれていない物語をたくさん楽しむことができる。また、題材が親しみのあるものではないため、文もセリフよりも説明する文が多くなっていく。そして、未知なことについて説明を聞いて理解するという学習の基本を経験することになる。仲間意識の芽生えや自然科学への興味・関心を持つようになる。

幼稚園教育要領・保育者保育指針の領域「環境」の内容は「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする³⁾」とある。ここには①どの素材を②どのような出会いの過程を通じて、という二つの視点がある。

(3) 2年生の実習園における環境教育の観察(実習経験2回)

外遊び	・虫のいそうな所へ行き、網で捕まえて容器に入れて観察をした。 ・落ち葉やどんぐり、ススキ等、秋の植物を見つけた。木の実や落ち葉を使い、お面やブレスレットを作ったり、製作等に用いて遊んだりできる。 ・葉っぱをチケットにして、公園で遊園地に見立てて遊ぶ。 ・同じ種類の葉っぱや木の実を集める。 ・木の枝でお絵かき ・見立て遊び(砂や木の実でおままごと) ・かくれんぼ ・虫探し ・色水遊び
室内遊び	・保育室や廊下に落ち葉等を置くことによって、子ども達が自らそれを調べ、保育者にその植物の名前や種類を聞き学ぶ。 ・ぬり絵 ・見立て遊び(玩具を見立てたおままごと)

ここから、2年生の学生達は実習を通して、幼児が遊びによって環境とかかわることを学んでいることが窺われる。

(4) 2年生の自由記述調査(実習経験2回)

保育科2年に、次の記述による調査検査を行った。既に、2回の実習を終えており、3回目の最後の実習に向かう直前に行った。

記述(問)

「絵本を子供の言葉の発達に用いる時、どの年齢の子供にどの児童文化財を与えたらよいのかを述べなさい。」

記述（解答）

・その時の子供の興味・関心があるものや、学んだものが絵本の中で登場している題材のものを用意すると子供達も集中して聞いてくれる。例えば、行事の日が近くて子供達にそれを感じられるように導入として本や紙芝居を読んだりするのが効果的だと思う。また、製作活動へ入る前に、その導入として製作の題材の登場する本や紙芝居が良いと感じる。そして、大切なことは、子供の年齢や発達段階に見合った内容のものを適切に選択することが大事だと感じる。あまりにも内容と子供の成長の姿がかけ離れてしまうと楽しいものから退屈なものに変わってしまうと感じる。

・保育園実習で0歳児に本を読んだ時、言葉がたくさんある物より絵で伝わる本（バナナの絵とか動物の絵など）で絵本を選ぶと、話の内容よりも、絵を楽しむことができるので、良いと実習指導担当の先生から指導された。これに対して、5歳児では頭の中で想像ができる本や、3歳児からは読みながら問いかけて話せる本を選ぶと楽しみながら活動できると教えてもらう。

・0, 1歳児は大きめの絵で繰り返しのある絵本。集中力がないから、短めが良い。

・3歳児での部分実習で、その時の行事がひなまつりだったので、おひなさまの絵本を読んだ。季節に合った本で、園内にもひな壇が置いてあったこともあり、子供達は真剣に見てくれていた。子供達の年齢に合った本で季節にも関連する絵本を読むと良いと思う。

・発達段階にあった年齢に合わせた絵本を読む事が一番良いと思う。たとえ、文字が少なくても、感情を出して読む事が良い。

・1, 2歳では、絵と文章が少しだけあるもの。3, 4, 5, 6歳は絵があり、文章が長いもの。発

達の年齢に合った対象となる絵本。

・『きんぎょがにげた』は、いなくなったきんぎょを探す絵本で、みんなできんぎょを探せると思う。そして、保育者、読み手はきちんときんぎょはどこだろうね？など声かけをすることも大切である。

・1~2歳児は『きんぎょがにげた』である。色彩がはっきりしていて、子どもの目を惹きつける。金魚が隠れんぼしていて、子どもが探しながら読むことを楽しむ。1~2歳の発達段階に適している。

・『だるまさん』は、だ・る・ま・さ・んという繰り返しの絵本になっていて、一枚、一枚違う読み方にした。1歳のいところに飽きないように繰り返し読むことは、大変でした。

1歳頃から楽しむことができる。子どもが指差しできる1歳3ヶ月~2歳頃から「きんぎょはどこにいるのかな」とお話ししながら読んでいくと楽しめる絵本である。学生からの聴き取り調査によれば、「実際に実習に行った保育園でも1歳クラスの子どもが指を使って探しながら読んでいて、人気があるためか絵本がボロボロになっていました。」と述べる。

『だるまさんシリーズ』の絵本は、物語の絵本ではなく、『だるまさんの目』といったように、目や手を出している絵本なので、1~2歳児の子ども達は笑顔でだるまさんの真似をするところもあったと実習を終えた学生は述べている。シリーズの『だるまさんが』では、「だるまさんがぶしゅー」という擬音で書かれているので「子ども達に分かりやすい絵や擬音で書いているので、読み終わった後も、繰り返し読んでほしいとせがまれた。」と述べている。

・0歳児は『もこもこもこ』独特な色形と不思議な音と動きの連続に、子ども達は喜んで反応する。

・長い内容の絵本を読んでしまい、子どもの集中力がなくなってしまったことがあった。子どもの集中力が続くように、途中途中で会

話を挟みながら読んだ。

・私は責任実習で紙芝居を読んだ。『むきむきでおいしい』という動物が食べ物の皮を剥くお話である。途中で問いかけるように「なんの食べ物なの？」と問い掛けると飽きずに見てくれた。」

発達段階別に次の本を挙げている。

・1歳児『おべんとう』, 2歳児『だるまさんが』『だるまさんの』, 3歳児『ぐりとぐら』, 4歳児『女の子と熊がぶどうを食べようとしたら小さくなってしまった話』, 5歳児『おいしいの冒険』『はじめてのおつかい』『はなちゃんのみそ汁』『からすのぱんやさん』『キャベツくん』『ももたろう』『おばけのもり』『めっきらもっきらどおんどおん』『おへそのなか』『くれよんのくろくん』『ジローとぼく』『スイミー』t『おじいさんのかさ』『はじめてのおつかい』『よくま』『どろんこハリー』『さつまのおいも』『そらめくんのベット』『もったいないおばあさん』『ぐりとぐら』『わたしのワンピース』『どうぞのいす』『こんとあき』『なつぺんぎん』

ここから、学生の幼児への発達段階への気付きがあることが窺われる。しかし、0~2歳児の絵本に対する知識は少なく、読んだ絵本から、3, 4, 5歳に対応する絵本（物語絵本）のみ挙げていることがわかった。

・5歳児「はじめてのおつかい」を読む。主人公のみいちゃんが担当したクラスの5歳児と同じ年齢の女の子だった。読み終わると子供達が「私もおつかい一人で行けるよ!」「一人で行ったことあるよ!」など言った。また、絵本の中に「牛乳ください」と何度も言うシーンがあるので子供達も一緒になって声をあげていた。

・5歳児『にじいろのさかな』の絵本を読んだら、うろこがキラキラしているので、とてもくいついて見ていた。絵本を読み終わった後には「絵本を見せて」「なんで絵本がキラキ

ラしているの」等という声があり、読んで良かったなと思った。2歳児クラスに入った時、全体に向けて『はらぺこあおむし』を読んだ。クラスの子供達は「はらぺこあおむし」を知っていた為「次は〇〇だよ!」や「早く次のページ!」などと発言してくれた。食べ物の名前が多く出てくるので、子供達が知っている名称があり、盛り上がりました。絵本の世界観に引き込まれている子供達の表情は楽し気で、目がキラキラしていた。

・私が実習で受け持ったクラスでは歯磨き指導の時に「歯磨きあそび」という絵本を読んだ。それは「ゴシゴシ」など磨く時の音を強調して指導していた。そして磨く時、強調していた「ゴシゴシ」と言いながら子供達は磨いていた。

3歳児, 4歳児は繰り返し言葉の本, 5歳児は感情の分かる本発達段階によって、読む絵本が異なっていることを記していた。ここから、身近な環境を題材に取り上げることが、幼児の興味を惹きつけることがわかる。

以上の記述から、絵本には、身近な環境に関する題材が取り上げられていることがわかった。また、2年生が実習での体験を元にして実習に、用いるデフォルメされた保育の遊び道具・アイテム作りを通して自然を観察し、園の内と外との環境の中に自然を取り込んでいこうとする姿が観察された。つまり、それは「環境教育を遊びの中で展開していこうとすること⁴⁾」であったと考えられる。

これらには、絵本の題材にある植物の栽培・動物を主人公にした作品・動物の形態を題材にした作品等がある。そして、これを保育実習のアイテムとして製作物に取りいれていることがわかる。(図1・2) 藤本堅・岩崎婉子・関口準は「環境教育に関する教材は何か特別のものがあつたのではなく、従来から日常的に利用している教材を環境教育という視点から見直して活用する⁵⁾」と述べ、環境教育の視点から間接体験として視聴覚教材があること

を指摘している。これは直接体験を補う補助教材としての役割をもつだけではなく、直接体験を支える教材としての価値があると考えられる。そして、幼児が直接体験ができないことをデフォルメされた視聴覚的な間接体験を通して理解できるメリットがあると述べている。



図1 絵本「スイミー」の手袋シアター



図2 手遊び歌「キャベツの中から」の手袋シアター

(5) 1年生の自由記述調査（実習未経験）

1年生の自由記述（問）

質問「植物を遊びに取り入れることで、子ども達は何を発見するか。」

1年生の自由記述（解答）

- ・子ども達が遊びに取り入れることで、自然の楽しさを学んだり、一つの植物でたくさんの遊び方があると発見したり、匂いや花の形の違いを利用して、大きさを比較して競うことができる。
- ・蟻と触れ合うことで虫との触れ合う。
- ・植物を育てたり、遊んだりすることで、その植物の手触り、匂い、色等を発見する。
- ・自ら遊ぶを考えることで創造力を広げていくきっかけにもつながる。

- ・自分達で植物を育てることによって、達成感を感じたり、リースを作ったりすることによって、うれしさや感動を覚える。その植物を道で見つけた時に感動すると思う。
- ・色彩感覚を身に付けられ、色彩によって感受性を養う。
- ・創造性・自発性を高められる。
- ・科学的興味を高める。
- ・植物の特徴を知る。

以上の1年生の記述から、環境の直接体験の記述が目立つ。そして、子どもの発達段階に合わせた環境教育への具体的な教育方法は記述されなかった。これは、1年次に言語指導法の講義をカリキュラムとして組み込む必要性を課題とすることがわかる。保育者養成校の入学初期の段階で、絵本を読む講義を導入することによって、学生の発達段階への意識が芽生えることが予測されるからだ。また、実習を迎える前までに、絵本の中に環境を題材とした絵本が多くあることに気づき、それを責任実習（各自が1日の実習を担当すること）の導入として取り入れていくことが可能だと考えるからである。

図1～図2は2年生が責任実習の前に作った保育のアイテムであるが、子どもの発達段階を考えた絵本の読み聞かせに必要な注意を集めるための導入の歌で用いる手袋シアターである。これを制作したのは2年生9月～10月である。これは3回目の実習に行く前である。岩崎婉子・藤本堅・関口準は「絵本の筋は、やがて忘れ去られることもあろうが、幼児の直接体験と絵本等の関節体験が何度も行き来することにより、環境に対する幼児の感性を育成できるのではないか。⁶⁾」と述べ、保育における保育者の教材選択の努力が一層期待されると述べている。環境の直接体験と絵本による間接体験の意識を入学当初の1年生の段階で教授する必要があると考える。それは絵本の発達段階別の理解と、環境指導法との連続性をといえる。

4. 結論

以上のことから、これらの目標を達成するためには経験知の少ない幼児の知識を補う先導役として環境教育の内容をもつ発達段階に合わせた絵本が子どもの成長には欠かせないことがわかる。

子ども達にとって、植物を環境に取り入れることで様々なことを感じたり、発見できたりすると考える。植物を園外や園庭ばかりではなく、保育室の絵本という間接教育の教材を用いて環境構成に取り入れることによって、遊びの1つとして子どもの心を刺激するものになる方法を考える必要があるのではないだろうか。

¹ 山崎敦子「体感することを重視した授業の展開について(2) 保育内容(環境Ⅰ)の授業」東北生活文化大学紀要 45,2014,p105

² 小谷宜路「幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究ー幼児の育ちを捉える視点と環境を構成する視点ー」埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 12,2013,p45

³ 岩崎婉子・藤本堅・関口準「幼稚園における環境教育(2) 絵本を教材とする視点から」日本保育学会研究論文集 47,1994,p120

⁴ 前掲書、p 10

⁵ 藤本堅・岩崎婉子・関口準「幼稚園における環境教育(1) 絵本を教材とする視点から」日本保育学会研究論文集 47,1994,pp122-123

⁶ 岩崎婉子・藤本堅・関口準「幼稚園における環境教育(2) 絵本を教材とする視点から」日本保育学会研究論文集 47,1994, p 125